

どん底の生活より

煤煙 塵芥 漲る毒瓦斯

日光は閉され 空氣が濕り

汚物の臭ひ タールの臭ひ

さてまた機械のやみなき騒音

心は亂され 眠りは奪はる

闇の底から呻きが洩れ來る

肺病 喘息の咳が震へる

チブスに軋され コレラに惱む

どん底の生活 人生の墓場

飢しい心の聲を嗔して

天を恨んで盲人が藝する

雪の降る日に子供が踊る

四辻にさらされて子供が踊る

泣くよな聲で唄つて踊る

路傍の奴等が黙つて見て行く

哀れな少女が稼ぎに出掛ける

雪の降る夜に素足で出掛ける

肉の切賣り バンの一片

どん底の生活 制度の悪夢
 工場を追はれ 社會を追はれ
 仕事を奪はれ たつた一つの
 健康も奪はれて穴に追はれる
 百軒長屋の穴に追はれる
 光も 熱も 朝の空氣も
 只一枚の新聞も奪はれ
 飢えと寒さに皆が戦く
 どん底の生活 闇に戦く

呪ふべき生活より

夜もなく日もなく工場で働く
 生活のためには毎日働く
 自由労働者が自由を奪はれ
 機械を作つて機械に使はれ
 機械の如く毎日働く
 煙にまみれて 毒瓦斯吸つても
 生活のためには毎日働く

組長が怖ろし 誠首が怖ろし

怖ゆる心は飲酒に溺るる

粗末な食卓の飲酒に溺るる

溺れた心の貧乏のせつなさ

着換も帽子も小遣もなければ

冷い蒲團にあわてゝもぐる

蒲團の中から子供が生れる

労働者に小供はいつでも生れる

生れた子供は子供の中から

巡査に引かれる 監獄に繋がる

呪ふべき生活 労働者の生活

労働に始まり 食卓に始まり 飲酒に始まる

寢床に始まり 労働に始まる

労働者の思ひ出

もとより労働者なれば

煤けた部屋のなかには

冷たき蒲團のなかには

温かき夢や 美しき思ひ出のある筈はなし

されども放浪の日の思ひ出よ——

いまもなほ放浪の身にはあれども

とりわけて煙突の街を目當に

急ぎたる過ぎし日の思ひ出よ

煤けた部屋のなかには

冷たき蒲團のなかには

温かき夢や美しき思ひ出のある筈はなけれど——

眼を閉づれば浮び出る

生きんとしてもがきたる

今も然れど——

哀れにもまた尊き俺の姿よ

どん底詩人Ⅳ・正吉の死

勞働詩人

どん底詩人

煤煙 塵埃の工場に埋れて

略取を憎み 征服を呪ひ

貧苦に襲はれ 病魔と戦ひ

暗黒 冷酷の社會に抗して

××を歌ひし

どん底詩人

暮れ逝く灰色の空を見詰めて

血を吐き逝きにし苦痛の詩人。

底の底にて歌へる歌は

底の底にてもがける俺等の

心に刻まれ夜も日も唱ふ

工場の窓より夜も日も唱ふ

工場の窓より唱へる歌は

やがて巷の民衆に唱はれ

階級闘争の行進曲となれり

労働詩人

どん底詩人

苦痛の詩人よ 静かに眠れ

底の底にて歌へる歌は

底の底にてもがける俺等の

心に刻まれ夜も日も唱ふ

左傾と赤化

左行け 行け 左行け

おまわりさんがそれ云ふぞ

飽食暖衣のブルヂユアが

大道狭しと真中を

ステッキ振り振り行く時は

左行け 行け 労働者

お前と紳士の間には

大きな 大きな溝がある

早く乗れ 乗れ赤切符

乗らんか出るぞ赤切符

其處は違ひます赤切符

青と赤とは違ひます

白と赤とも違ひます

あなたは労働者で赤切符

労働者は何處でも赤切符

メーデー

ナツバ着たまゝ馳せつけろ

今日はメーデーだ 俺等の日だぞ

油ナツバのまゝで出ろ

ベルト断ち切り ハマ投げ捨てゝ

ゴム靴のまゝ飛んで出ろ

生れた階級を愛するならば――

労働階級を愛するならば――

スコップ放つて飛んで出ろ

飛んで出て行け 五月の街に

風は春風 心のまゝに

鐵の二の腕打ち振るへ

瓦斯も 電氣も ×めてやれ

俺等が双腕貸さない時は

汽車も 電車も 自動車も

動かか奴等に見せてやれ

今日は飽迄俺等奴日だぞ

「マル」や「クロ」の理論は抜いて

「宣言」などの形式止めて

たゞ××に訴へろ

十二行抹殺

階級闘争の精神を
分らぬ奴に見せてやれ

今日は俺等のメーデーぞ
黒旗なびくメーデーぞ

獄中に歌ふ

煤けた壁よ 石の壁よ

俺の歩いた生活の

はげた汚れた斷片が

ぼんやりとして浮びでる

牢獄の壁よ 石の壁よ

それはあまりに傷ましい

そしてかなしい生活だ

貧の惱みと 不自由の

鎖にかたくしばられた

血潮したゝる生活だ

底の底なる炭坑の

坑夫としての生活よ

旅から旅を流れゆく

人夫としての生活よ

はてなき流浪の勞役の

(二字不明) 連鎖にしばらくし

あゝ悲痛な生活よ

俺の歩みし生活よ

其處でつかんだものは何

重たい 重たい この鎖り

鐵の鎖があるばかり

市ヶ谷より

わが友よ

晩夏のかゝる夕は 君もまた

刺されたる かのデョーレスが如くに

××のため はた××のため

満腔の熱血をもて語りてぞあらむ

わが友よ――

愛する友よ――

されば來るべき××の日のために

赤き酒を手に舉げて

高らかに語り ほがらかに歌ひ給へよ

沈む日のあかあかと

獄舎の窓に染む頃は

重き鎖も鳴るものを

(東京監獄時代)

獄舎の窓より

脊を伸ばし

獄舎の窓より見渡せば

おゝ野に山にさてはまた

森に 林に凋落の

見よ――

痛ましい秋は來た

秋は來たのだ

わが友よ——

工場の友よ滅び行く

汝よ青春の血を惜しめ

ハンマ振り捨て野に出でよ

野には榮華に酔ひ果てし

あゝ枯草が打ちなびく

その枯草に火を放て

放つて踊れ火の舞踏

生の歡喜の火の舞踏

われとわが身の燃ゆるまで
踊りつくせよ火の舞踏
そのあとにのみ永久の
われ等が春の芽が生る

(東京監獄時代)

大正十五年四月五日印刷
大正十五年四月十日發行

(定價金五拾錢)

後藤謙太郎詩歌集

勞勳・放浪・監獄より

著者 故後藤謙太郎

大阪市浪速區水崎町七一七番地

發行兼印刷人 逸見吉三

大阪市難波區市岡町三五五

印刷所 秀文社印刷所

大阪市住吉區住吉町一六七

文明批評社內

發行所 後藤謙太郎遺稿集刊行會